

分科会 13

地域移行と病床転換型居住施設を考える ～それぞれの立場から脱施設化の理念を語り合う～

コーディネーター：古屋龍太（日本社会事業大学）
小佐野啓（相談支援センタークレイ）
中越章乃（神奈川県立保健福祉大学）

この分科会では、2009年の第一回から主に地域移行支援に携わるピアサポーターの活動などをテーマとして開催してきました。今年は様々な議論のあった病棟転換型居住施設（地域移行支援型ホーム）にテーマを絞って議論をする場とするため、グループワークの時間を多く取りました。

はじめに、コーディネーターの古屋氏から、この施設の構想に関する議論の経過、検討会で出された意見や長期入院精神障害者をめぐる状況などの報告をおこないました。毎年2万人を超える人が精神科病院で亡くなっている現状と、住まいが病院の敷地内であれば退院したくないという回答が圧倒的に多かった患者意向調査（第2回長期入院精神障害者の地域移行に向けた具体的方策に係る検討会（2014年5月12日）における配布資料より）の結果も示されました。

続いて、全員で最初に座っていた場所ごとにグループを作り、「病棟転換型居住施設に関して思うこと、考えること」について話をさせていただき、模造紙に付箋などを使ってグループの意見をまとめました。限られた時間ではありましたが、課題は？ 地域とは？ 自分たちにできることは？ 等々、グループごとに特徴あるまとめがされたと思います。

その後、ワールドカフェ方式で意見交換を図りました。グループの中で一人の留守番役だけを残して、参加者は他のグループにバラバラに移動します。訪問先のグループでは、そのグループでどのような意見が交わされたのかの説明を受け、質疑応答の時間となりました。それぞれのグループの留守番役の人から説明を受けるのですが、自分のグループとの共通点はもちろん、自分たちにはなかった意見などに対して、数多くの質問や意見交換がおこなわれていました。

このセッションを4回繰り返した後、全員が最初のグループに戻り、お互いにこんな話を聞いた！ こんな質問があった！ 等の情報交換をしました。その後、施設を運用するならどのような条件が必要か、なぜこの施設が地域とは言えないのか、自分が入院している立場だったらどうしたいか？ など、自由に意見を出し合うことができました。

精神病棟を転用する「地域移行支援型ホーム」が、実際にどこかの地域で開設準備中だという情報はありませんが、いつ開設されてもおかしくないのも事実です。地域や自由をどう考えるのかという根本的な議論が尽くされないまま現在に至っています。

真摯にご本人たちの意見に耳を傾け、自分に置き換えて考え、「なぜ自分はこのように考えるのか」の根拠をしっかりと持つことが必要であると感じました。その根拠を、少しでも多くの人と交換しあうことが、国策として入院を進めてきたこの国の国民みんなが脱施設化を考えることにもつながるのではないのでしょうか。